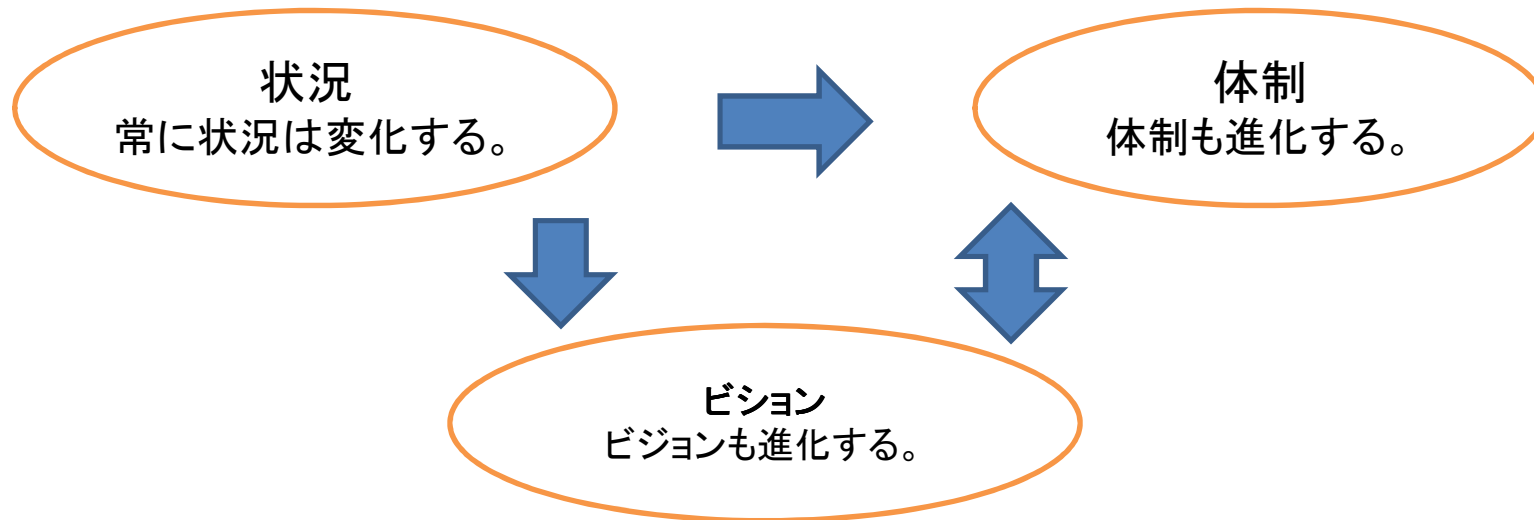




2011年9月1日現在

— 遠野まごころネットのVision

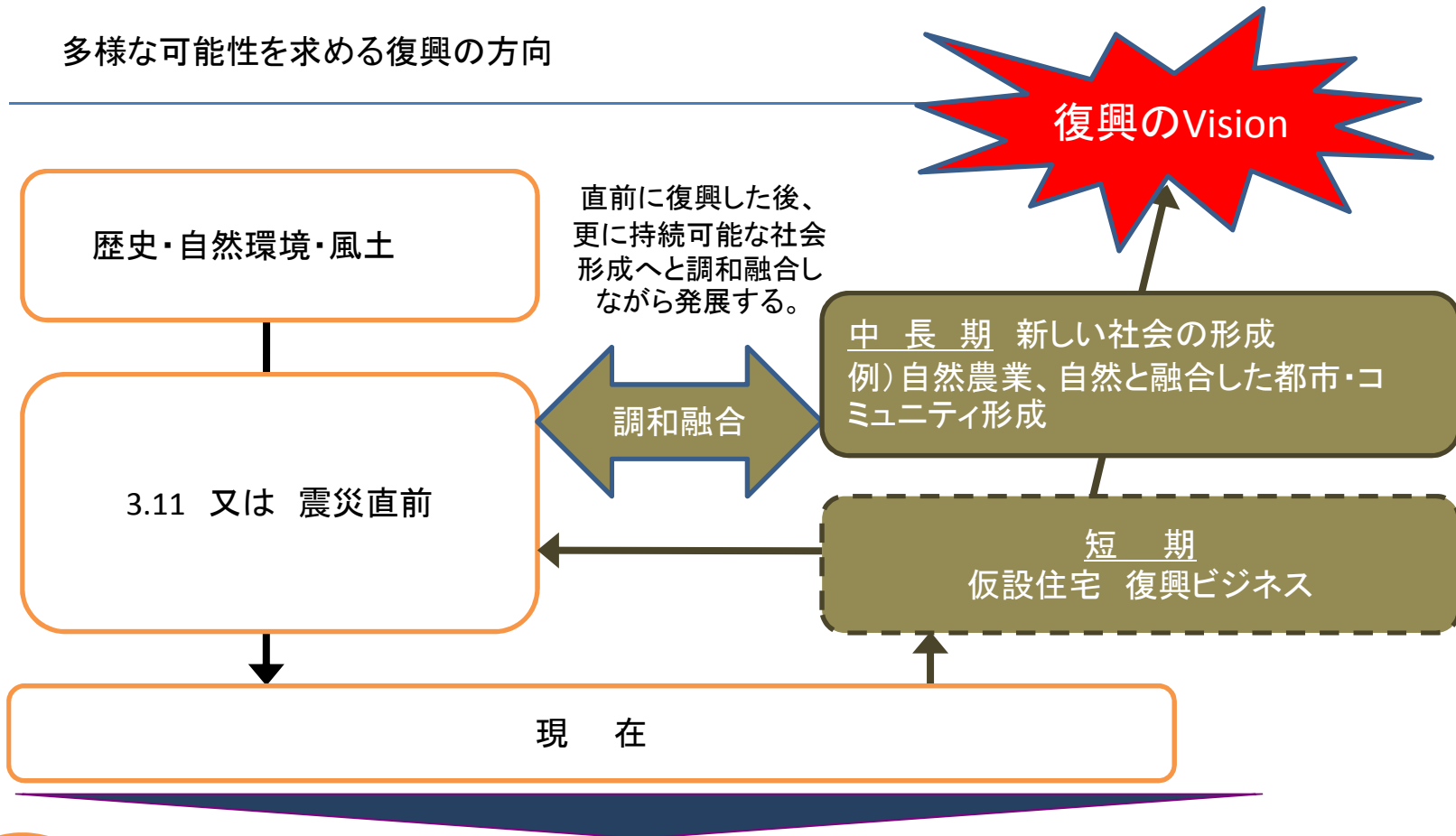
時の流れと、時のニーズに対応



- ・遠野まごころネットは「被災者のために」が出発点であり、自己実現を優先して活動しない。
- ・「ボランティア活動は競争でもなく、自己満足でもない。」主役は、被災者と被災地、あくまでもサポーターとしての活動を意識する。
- ・自由に意見を交換できる雰囲気と場を大切に、実現に向けて“Yes”という雰囲気を保つ。
- ・緊急支援のネットワークから復興支援のネットワークへ境界のないネットワークを構築し「無現連携」を基本とする。

復興の方向 風土と共存した社会構築への意識づけ

多様な可能性を求める復興の方向

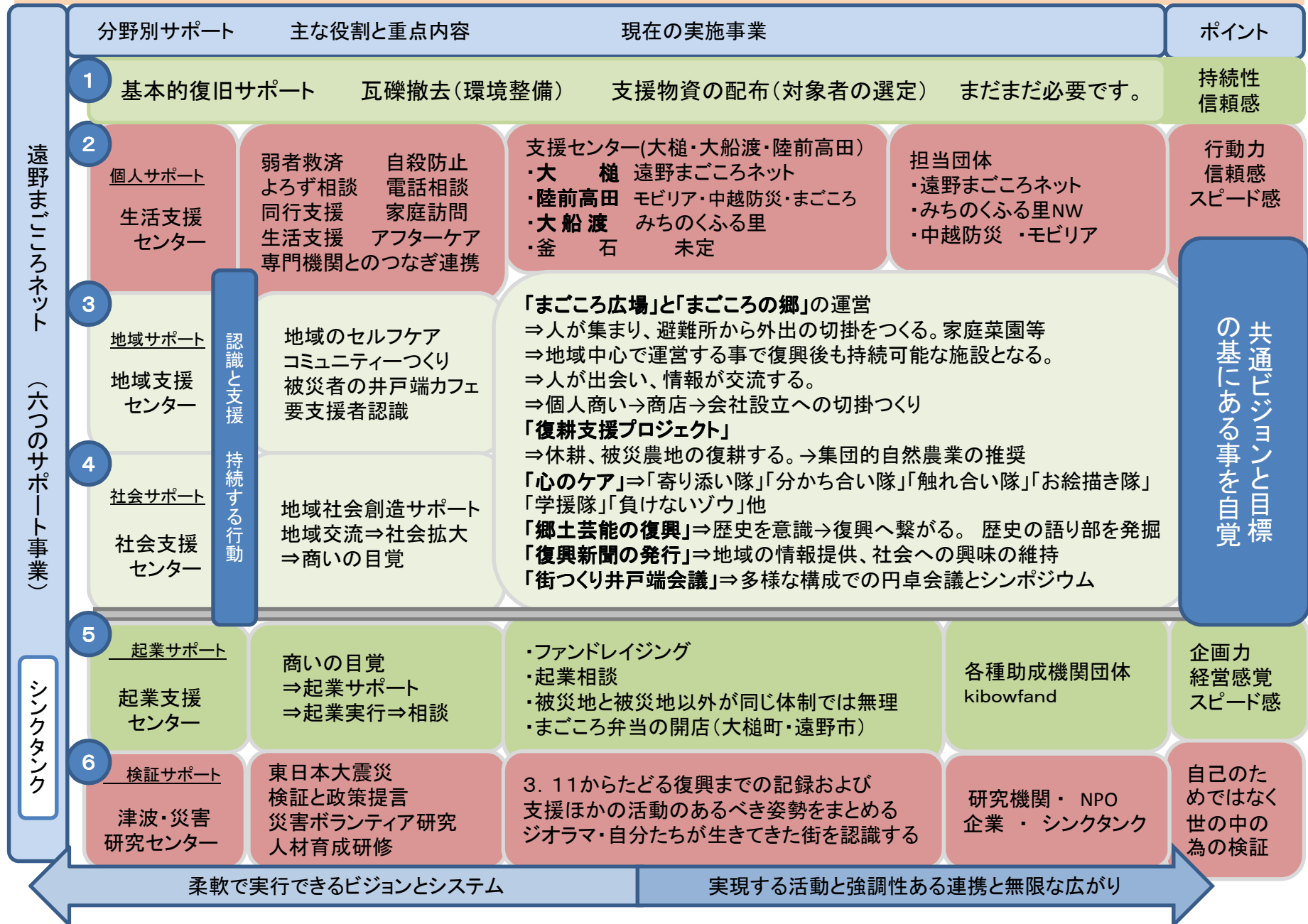


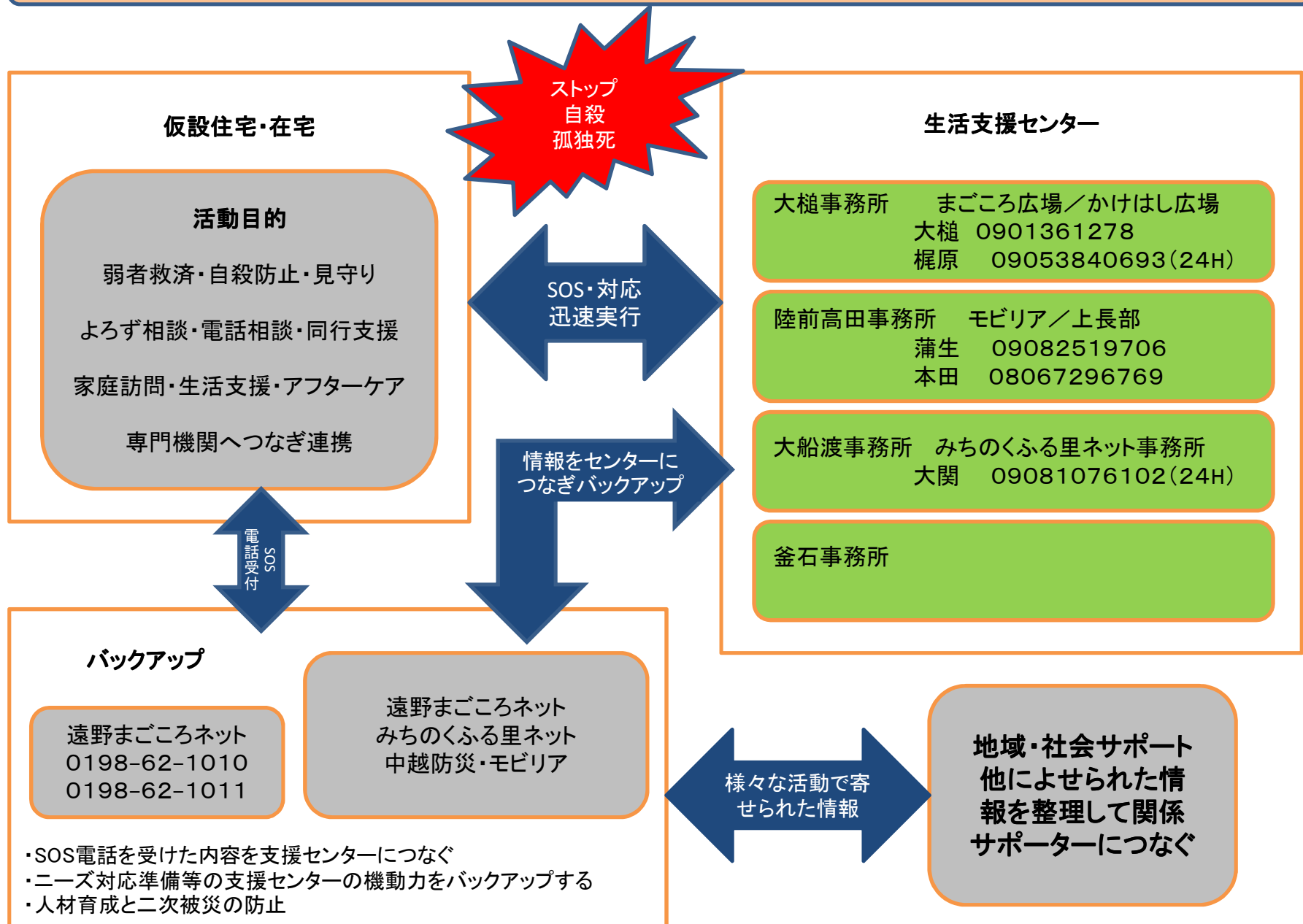
官民
共同

- 現状の復興Visionが不明 ⇒ 3.11の直前に戻る“復旧”となってしまう。
- 自然と融合した社会を築く機会であり、最終地点を示すVisionが必要となる。
- Visionに沿った中長期的街づくり、短期的な復興を明確にする必要がある。

官民の境界線を無くして長期的な支援を行うプロジェクト

—全体構想図—





- ・まごころの郷
- ・コミセンの郷
- ・企業の郷

仮設の間をつなぐコミュニティーを創る。
 今までは避難所だった。⇒ 本当の意味でのコミセンに転換する。
 これからは企業の担う役割は大きくなる。資金、人の片方支援でも十分。

企業

- ・ 企業は自社を宣伝できる。CMでOK
- ・ まごころの郷を企業が応援する。
- ・ 企業が協力して住民を守り地域を育てる。

〇〇の郷

憩いの小屋

生きがい創造

- ・ 集団菜園 ・ 家庭菜園
- ・ 趣味 ・ 井戸端カフェ
- ・ 小商いの始まり

地域の「絆」再建

心身のケア
弱者救済

つなぎ

避難所

仮設住宅
在宅

仮設から
外に出る

外出

支援

生活支援
センター

外出支援他
個人サポート

行政機関
民間福祉関係団体
官民の連携で活動を展開する。

地域

地域住民による地域のセルフケアを推進することによって同時にコミュニティー形成が進む。
 ・ 井戸端カフェの推奨 ⇒ 地域の人自らが運営する。(ボランティアはサポーター)

ケア

関連

「まごころ広場」と「まごころの郷」の運営

⇒人が集まり、避難所から外出の切掛をつくる。
 家庭菜園等
 ⇒地域中心で運営する事で復興後も持続可能な施設となる。
 ⇒人が出会い、情報が交流する。
 ⇒個人商い→商店→会社設立への切欠づくり。

「復耕支援プロジェクト」

⇒休耕、被災農地の復耕する。
 → 集团的自然農業推奨

「心のケア」

⇒「寄り添い隊」「分かち合い隊」「触れ合い隊」
 「お絵描き隊」「学援隊」「負けないゾウ」他

「郷土芸能の復興」

⇒歴史を意識→復興へ繋がる。歴史の語り部を発掘

「復興新聞の発行」

⇒地域の情報提供、社会への興味の維持

事業例 1

—大槌ハーブの郷—

大槌町の例（地域支援プロジェクトからの発展型）

地域と共同で郷創りを進める。



仮設住宅から外へ出て、地域が地域をケアする。在宅者やボランティアとの交流の場となる。



生きがいつくり、将来も交流の場として有効活用でき、産業発生の可能性もある。ハーブ商品等



ボランティアは姿を消し、ボランティアだった人が毎年訪れる。他市町村と地域間交流の場ともなる。体験宿泊



大槌町の自然に親しめる場として永続的に残る。



上記は現在イメージです。協議により変更が生じる可能性があります。

事業例 2

—上長部まごころの郷—

陸前高田の例（復耕支援プロジェクトからの発展型）

この地域に流出したサンマが腐敗して地域を悪臭が包んだ。



瓦礫がサンマの上に横たわり、サンマの回収は難航した。



やがてサンマと瓦礫が撤去され、活動は、復耕支援へと進んだ



復興も復耕も地域とボランティアが一体となって進んだ。



畑に撒いた種は目を出し、花が咲いた。野菜も実がなった。

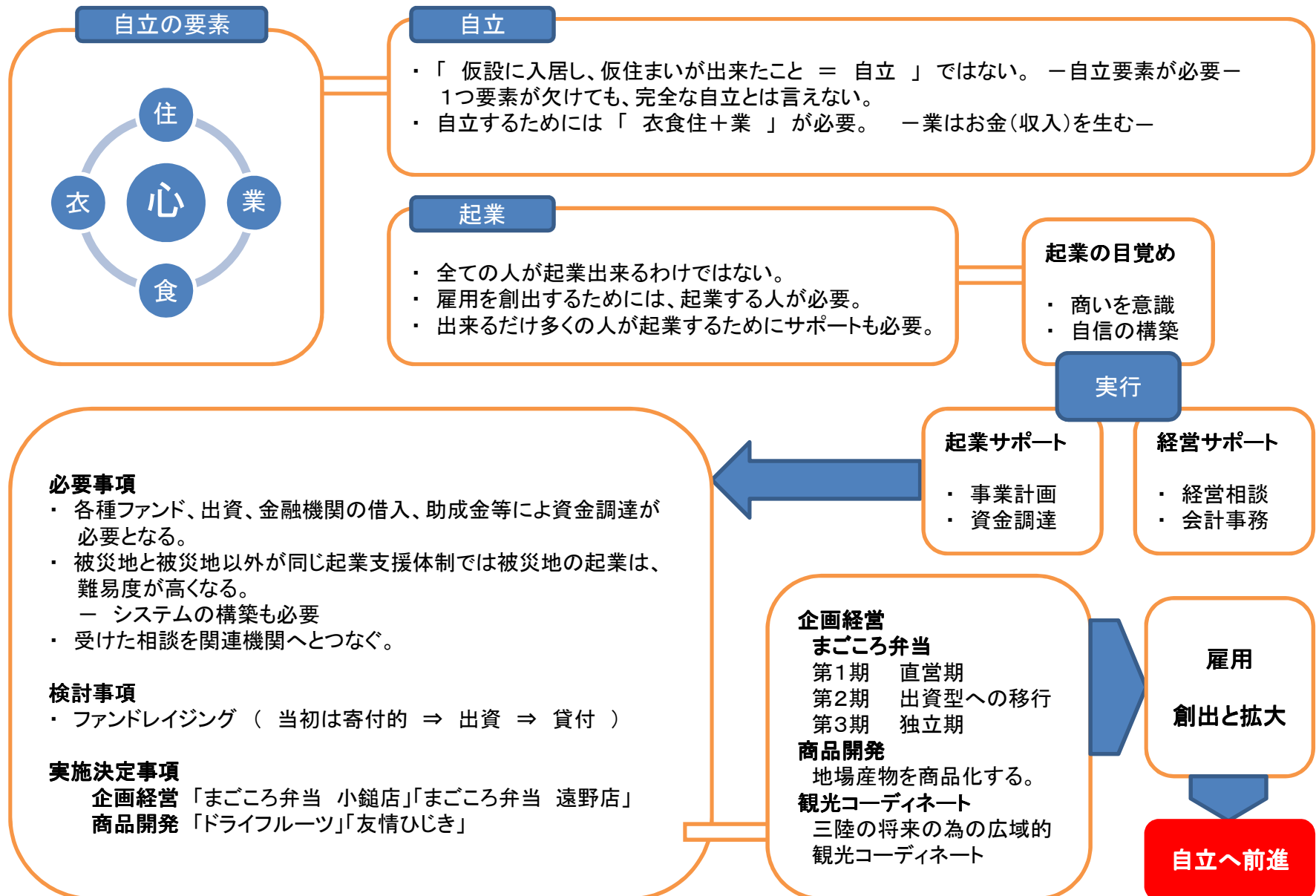


仮設住宅から外へも参加している。地域が地域をケアしている。



ボランティアは姿を消し、ボランティアだった人が毎年訪れる。他市町村と地域間交流の場ともなる。農業体験宿泊等

上記は自治会、行政と協議して決定した計画ですが、変更が生じる場合があります。



検証責任

3.11から6カ月が経過します。振り返ると過去の災害を参考として実践的に活用できるフォームとなっているものは少なかった。

被災地は、本当に破壊された状態でだった。しかし時の流れは以上に早く、始めの3日、7日、10日、14日、そして1カ月はあっと云う間で、被災地のニーズにはとても追いつけなかった。地図、避難所、物資、心のケアと被災地に必要なものは、山ほどあるが、ほぼ手探りで進む状態だった。

世の中の記憶も、我々の記憶も、やがては風化する。

我々にはこの記憶と状況ごとのニーズを、後進に伝える責任がある。

被災の瞬間から被災地の状況と支援活動を検証し、活動のあるべき姿をまとめてこの後に役立つようにしなければならない。

開かれた検証

自己ためではなく、世の為に検証を進めるべき。

研究社や団体の内部に留める為のものであってはいけない。

意識付け

ジオラマ・自分たちが生きてきた街を認識する。

年代別ジオラマ

街づくり井戸端会議

検証と提言内容

東日本大震災
政策提言
災害ボランティア研究
人材育成研修

災害時から現在までの時間経過ごと検証

救済・支援・復興活動上必要な政策の提言

災害ボランティアが果たすべき役割とあるべき姿勢

緊急から復興・弱者救済に携わる為の研修会

関係機関との連携を深め
必要に応じ、適宜テーマ
設定を行い、検証する。

関係団体

地元の個人、団体
研究機関（大学）・NPO
企業 ・ シンクタンク